

ルターと音楽

木村 佐千子

0. はじめに

ルター Martin Luther (1483-1546) が聖書をドイツ語訳したことや、その宗教改革によってそれまでラテン語で行われていたキリスト教の礼拝が民衆語（自国語、ドイツ語）で行われるようになったことは、広く知られている。しかし、キリスト教の信者を別にすれば、ルターが自ら賛美歌などの作詞・作曲をしたということはあまり知られていない。本稿では、ルターと音楽の関わりに焦点をあて、ルターがドイツ語の賛美歌を作詞・作曲をするに至った経緯やルターの音楽観について記す¹⁾。ルターについての研究文献は数多く存在し、特に2017年の宗教改革500周年を契機として多くの文献やCDが刊行された。それらの内容を整理して筆者なりの視点でまとめ、日本語で紹介することに本稿では重点を置いたが、筆者独自の観察・分析も行っている。また、ドイツ語引用文の日本語訳は、特記しない限り筆者が行った。

1. 音楽と礼拝

ルターは音楽に造詣が深く、歌ったり楽器の演奏をしたりしたことが知られる。ルターが初めて音楽に触れたのは家庭でのことで、ルターは母が《私や君

1) 本稿は、2017年11月11日の「獨協大学インターナショナル・フォーラム ドイツ文化とルター」での講演内容を、新しい文献の内容もとり入れて、大幅に拡充したものである。

には誰も好意をもたない *Mir und dir ist niemand hold*》という歌を好んで歌っていたことをのちに回想している²⁾。また、ルターの父はビールを飲んでくつろぐと、歌を歌っていたという³⁾。ルターがはじめに音楽教育を受けたのは、キリスト教の教会付属のいわゆるラテン語学校においてだったようだ。ルターは、5歳だった1488年⁴⁾から大学に行くまでラテン語学校に通った⁵⁾。学校の生徒たちは教会の礼拝で合唱などを担当していたため、音楽の授業を受けていた。ルターはことのほか美しいアルトの声で歌ったようで、その歌声に感銘を受けた裕福な夫人から、食事や宿舍の提供を受けていた時期もあった。また、生活費を稼ぐために家々を訪ねて歌って歩くクレンデ *Kurrende* と呼ばれる活動も行った。アイゼナハのクレンデでは多声合唱も歌われたといい、アイゼナハ時代にルターの音楽の技能はかなり向上したと考えられる⁶⁾。

当時の大学では、中世からの伝統で、今でいう一般教養科目のようなかたちで音楽が教えられていた。中世の大学では自由七科、すなわちリベラル・アーツとして7つの科目が教えられ、そのうち3つが言語系の科目（文法・修辞学・論理学、*trivium*）であり、音楽は算術・天文学・幾何学と並んで数学系4科目（*quadrivium*）のひとつに数えられていた。音は振動であり、振動数の比が単純な音ほど調和するというこゝで、調和の理論とも結びつけて教えられた。ルターは、1501年にエアフルト大学に入学した。1412年のエアフルト大学規則によれば、ヨハンネス・デ・ムリス *Johannes de Muris* (ca. 1300– ca. 1360) という14世紀の音楽理論家の書いた著作『ボエティウスによる思弁的

2) WA Tischreden 4, S. 413–414 (Nr. 4640) および WA 38, S. 388. WA は、ヴァイマル版ルター全集 (*D. Martin Luthers Werke, kritische Gesamtausgabe*, Weimar: Hermann Böhlaus Nachfolger, 1883–2009) を指す。

3) WA Tischreden 4, S. 636 (Nr. 5050).

4) <http://www.lutherstaedte-eisleben-mansfeld.de/orte-region/mansfeld-unterkuenfte-urlaub/schenswuerdigkeiten-mansfeld-ausfluege/lutherschule/> (2017年9月15日参照)

5) 1497年までマンスフェルトの市立学校 (*Stadtschule*)、その後1年マクデブルクの大聖堂付属学校 (*Domschule*)、1498年からアイゼナハの聖ゲオルク教区学校 (*Pfarrschule zu St. Georgen*) に通った。

6) Leaver 2017–1, p. 26.

音楽 *Musica speculativa secundum Boetium*』(1323年)などを用いて学生は音楽を学んだという⁷⁾。そのほか1503年の怪我療養中⁸⁾に、リュート演奏と「インタヴォリーレン *Intavolieren*」という編曲技法⁹⁾を学んだ。また、学生たちはヴェルギリウス *Publius Vergilius Maro* (70-19 v. Chr.)、オヴィディウス *Publius Ovidius Naso* (43 v. Chr. - ca. 17 n. Chr.)、ホラティウス *Quintus Horatius Flaccus* (65-8 v. Chr.)らの詩に曲をつけて歌ったという。のちに音楽家ヴァルター *Johann Walter* (1496-1570) がルターに歌詞への音楽のつけ方を誰に学んだのか訊いたところ、ルターはヴェルギリウスに習ったと述べたという¹⁰⁾。

1505年に法学部を中退し、修道院に入ってから、毎日の聖務日課(時課)で詩編、賛歌などの歌を歌い、まさに祈りと歌にひたる生活だったようだ。ラッツェベルガー *Matthäus Ratzeberger* (1501-1559) は、修道院に入った頃のルターについて、友人たちが「よい音楽家 *ein guter Musicus*」と評していたことを伝えている¹¹⁾。その後、1521年にヴォルムスの帝国議会に召喚されたとき宿舎でリュートを弾いたことが伝えられる。コホレウス *Johannes Cochläus* (1479-1552) によれば、ルターは数か所でリュートにのせて歌を演奏し、オルフェウスのように人々の耳目を惹きつけたという¹²⁾。また、ルターが自宅でリュートを弾いたり、来客とともに美しいテノールの声で歌ったりしたことを

7) 1412年のエアフルト大学規則では、この本を少なくとも1カ月は用いることされている。この規則は、1519年に改訂されるまで有効だったと考えられる。Leaver 2017-1, p. 27. ほかに、アダム・フォン・フルダ *Adam von Fulda* (ca. 1445-1505) の『音楽論 *De musica*』(1490年)もほぼ確実に用いられていた。Leaver 2017-1, p. 34.

8) 松浦は「身に着けていた短剣で大腿だかふくらはぎだかを深く傷つけた」と記している。松浦、1994年、81頁。ゲックは、大腿部の怪我と記している。Geck 2017, S. 25.

9) 声楽作品を鍵盤楽器やリュートなどで演奏するために行う器楽編曲。タブラチュア(奏法譜)で記すことが多い。

10) Leaver 2017-1, p. 29.

11) Leaver 2017-1, p. 30. ラッツェベルガーは、1538~1546年にルターの内科医だった人物である。

12) Leaver 2017-1, p. 34. コホレウスは、1520年以降ルターと対立したカトリックの神学者である。

伝える記録は多い。たとえば、マテジウス Johannes Mathesius (1504-1565) によれば、仕事に疲れたらルターはテーブルについて、気心の知れた人たちの前で、ヴェルギリウスの『心惹くこの形見の衣よ Dulces exuviae』¹³⁾からディド Dido の最期の言葉をマテジウスらとともに歌い、メランヒトン Philipp Melanchthon (1497-1560) も加わることがあったという¹⁴⁾。また、ルターは息子たちと応唱を歌い、ポリフォニー（多声音楽）を歌う場合はアルト・パートを担当していたという¹⁵⁾。音楽家ディートリヒ Sixt Dietrich (ca. 1493-1548) はルターが音楽好きで、よく一緒に歌ったと述べており、音楽家アルバー Erasmus Alber (ca. 1500-1553) はルターがよい声で歌ったことを伝えている¹⁶⁾。職業音楽家たちも認めるほどの楽才があったようだ。さらに、ルターは、楽譜の誤りに気づいて正すこともあったといい¹⁷⁾、楽譜も正確に読めたことがうかがえる。美術に関しては、紙の欄外にスケッチをした程度で、ルターみずからが絵を書くことはあまりなかったようだが、音楽には理論・実践ともに取り組んだ。このような音楽の素養・才能のあったルターは、みずからの教派の礼拝に、積極的に音楽をとり入れていった。

それでは、ルターの改革について見る前に、それまでのカトリック教会における音楽のあり方を見たい。そもそも、キリスト教会で礼拝に音楽を用いることの根拠は、聖書に求められる。聖書は、大きく旧約聖書と新約聖書に分けられる。旧約聖書は、ユダヤ教の正典でもあり、キリスト教の立場からはイエス Jesus Christus (6/4 v. Chr. - ca. 30 n. Chr.) 誕生までの預言などを記した書という意味合いがある。旧約聖書では、たとえばモーセ Mose (13 Jh. v. Chr.?)

13) ここには作曲者名は記されていないが、この詩にはジョスカン・デ・プレ Josquin des Prez (1450/5-1521) やジャン・ムトン Jean Mouton (ca. 1459-1522) ら多くの作曲家が作曲している。ラウ Georg Rhau (1488-1548) の1538年と1542年の印刷譜には、作曲者名なしで《心惹くこの形見の衣よ》が印刷されており、リーヴァー Robin A. Leaver は、1538年の印刷譜にルターが序文を寄せていることから、この歌がルターの作品である可能性を指摘している。Leaver 2017-1, p. 356.

14) Leaver 2017-1, p. 29.

15) Leaver 2017-1, p. 47.

16) Leaver 2017-1, pp. 47-48.

17) Leaver 2017-1, p. 47.

がイスラエルの民を率いてエジプトを脱出したあと（そのとき海が分かれたという言い伝えがある）、神を賛美して、小太鼓を演奏しながら歌ったことが伝えられる（『出エジプト記』第14～15章）。また、賛歌、嘆きの歌、感謝の歌などを集めた『詩編』には、「新しい歌を主に向かって歌え」¹⁸⁾という呼びかけが見られ（第96、98、149編第1節ほか）、第150編には角笛、琴、豎琴、太鼓、弦楽器、シンバルを鳴らして「息あるものはこぞって主を賛美せよ」とある。『詩編』の詩を書いた一人とされるダヴィデ David (ca. 1000 v. Chr.) は、紀元前1000年頃の豎琴の名手で、イスラエルの王サウル Saul (ca. 1080-1012 v. Chr.) を音楽で慰めたという。今でいう音楽療法にあたるだろう。一方、新約聖書はイエス・キリストの生涯や初期キリスト教会のことについて紀元後1～2世紀に記されたキリスト教の正典である。新約聖書には、「一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた」（『マタイによる福音書』第26章30節と『マルコによる福音書』第14章26節）、「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると」（『使徒言行録』第16章25節）、「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい」（『エフェソの信徒への手紙』第5章19節）などという記述があり、イエスの生前から祈りにあたって歌が用いられていたことが分かる。神は音楽にのせた祈りに敏感だと考えられていたのだ。このような考えから、キリスト教会では、日曜・祝日に行われるミサも、伝統的には毎日8回行われる聖務日課（時課）も音楽で彩られている。

なお、新約聖書には、旧約聖書ほど楽器は出てこない。また、楽器が出てくる場面でも、たとえば『ヨハネの黙示録』で審判のラッパを吹くのは天使で、新約聖書には人間が楽器を演奏するシーンは見あたらない。このことと、古代・中世の社会で楽器はお祭りや宴会などの世俗的な場で演奏されていたこととで、礼拝での楽器の使用を避ける考え方があったが、カトリック教会でも徐々にオルガンは使われるようになっていった。

18) 聖書の日本語訳は、特記しない限り『新共同訳聖書』（日本聖書協会、2007年）から引用する。

礼拝において歌が重視されていたとはいえ、ルターの頃のカトリック教会では、基本的に会衆は歌わず、専門の聖歌隊や司祭・聖職者がラテン語で歌う歌を受動的に聞いているだけだった。15世紀前半(1414~1418年)に行われたコンスタンツ公会議では、会衆が歌うことが禁じられたほどである¹⁹⁾。

さて、ルターは1523年に『ミサと聖餐の原則 Formula missae et communionis』²⁰⁾を出した。これはツヴィッカウの牧師ハウスマン Nikolaus Hausmann (1578/59-1538)宛のラテン語の書簡というかたちをとっている。ルターは、「礼拝式を全く廃止する意向はなく(中略)、最もいまわしい付加によって汚された現在用いられているものを純化し、その信仰的な使用を指示する」²¹⁾ことを意図してこれを書いた。つまり、時間が経つなかでカトリック教会によって変えられたり付け加えられたりしてきた礼拝要素のなかで、ルターが問題と考えるものを取り除こうとしている。それ以外のところは、急激な変化を避け、基本的にラテン語で礼拝を行うが、説教は自国語(ドイツ語)とすると述べている²²⁾。また、会衆の歌う歌については、自国語にしたいが自国語の歌が少ないと記している²³⁾。ラテン語は、文法が複雑で、当時の一般の人にはなかなか分からない言語だった²⁴⁾。ルターは、一般の人に分かりやすいようにと、礼拝等にドイツ語をとり入れていくが、決してラテン語を否定していたわけではない。むしろ、若者には世界で通用するラテン語をも身につけることが必要だと

19) Küster 2016, S. 25.

20) WA 12, S. 197-220. 日本語訳は徳善、2012年、435-460頁。

21) 徳善、2012年、438頁。

22) 徳善、2012年、441頁。「…自国語の説教がこれを補うであろう。もしも将来、ミサが自国語で行われるようになれば(これをキリストはお喜びになるだろう)、使徒書と福音書は…」

23) 徳善、2012年、454頁。

24) ヨーロッパの中世の教会堂は残響時間が長く、言葉がはっきり聴きとりにくかったため、聴くだけであれば何語でも変わらない、あるいは何語でも言葉はよく聴こえないといった状況ではあったようだ。プロテスタント教会では、はじめはカトリック教会の建物を使っていたが、プロテスタントの教会堂が新たに建てられる場合には、聖書朗読やそれを解釈する牧師の説教を会衆が理解することを重視するため、残響時間が短めになるように建てられることが多い。

考えていた²⁵⁾。ラテン語学校のある都市部では、宗教改革後もラテン語が礼拝に残っていき²⁶⁾、18世紀に入ってから礼拝でラテン語の歌が歌われた。また、通常の日曜日にはドイツ語中心の礼拝が行われる教会でも、重要な祝祭日にはラテン語が用いられた²⁷⁾。

一方、1526年に出版された『ドイツ・ミサと礼拝の順序 Deutsche Messe und Ordnung Gottesdienstes』²⁸⁾では、礼拝全体をドイツ語にするやり方が書かれている。ルターは、出版より前の1525年10月29日にヴィッテンベルクの教区教会 Pfarrkirche St. Marien でドイツ語礼拝を行っており、他所でもドイツ語のミサや礼拝が必要とされていたことからこの書を執筆した。『ドイツ・ミサと礼拝の順序』には、ドイツ語で式文を歌う場合の旋律等が楽譜で示されており、表紙を除く46ページのうち28ページに楽譜があり、ページ全体が楽譜になっているところも多い²⁹⁾。ルターは音楽の才能があったとはいっても専門の音楽家ではなく、教会活動を軌道に乗せるためにやらなければならないことがほかにも多くあった。そこでルターを保護していたザクセン選帝侯の宮廷楽長ルプシュ Conrad Rupsch (ca. 1475–1530) や同じ宮廷の歌手だった

25) WA 19, S. 74. „Denn ich nun keynen weg will die latinische sprache aus dem Gottis dienst lassen gar weg komen, denn es ist myr alles umb jugent zu thun. ... Denn ich wollte gerne solche jugent und leute auffzihen die auch nun frembden landen kunden Christo nütze seyn und mit den leuten reden ...“

26) 当初、ラテン語礼拝は大聖堂や教会での数時間続くような大規模な礼拝のため、ドイツ語礼拝は小さな村の教会などでの簡潔な礼拝のためと考えられ、時間の短いドイツ語礼拝がそのあとの標準になっていく。Nettl 1967, p. 68. 『ドイツ・ミサ』のなかでも、礼拝やミサの3つの種類の第一に、ラテン語によるものが挙げられている。WA 19, S. 73.

27) Leaver 2017-1, p. 193.

28) WA 19, S. 44–113. 日本語訳は『ルター著作集第一集第六巻』1963年、413–493頁(青山四郎訳)。

29) ハレ = ヴィッテンベルク大学 HP に載せられているオリジナル印刷本のデジタル資料でページ数を計算した (<http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/1001374>, 2018年2月12日参照)。なお、Leaver 2001, p. 370では序文を除く39ページのうち31ページに譜例があると記されており、Leaver 2017-1, p. 18では49ページ中27ページが楽譜であり、残る22ページでも音楽についての言及が多いと記されている。

ヴァルターの協力を得て、『ドイツ・ミサ』の旋律を考えたようである³⁰⁾。『ドイツ・ミサ』では、以下の箇所でドイツ語の歌を歌うようにとの指示がある。

- はじめに1曲の宗教歌またはドイツ語詩編 [《どのようなときも私は主をたたえ Ich will den herrn loben alle zeyt》、『詩編』第34編2～23節]³¹⁾
- 使徒書朗読のあとに《いま我ら聖霊に祈らん Nu bitten wyr den heyligen geyst》など1曲のドイツ語の歌³²⁾
- 福音書朗読の後に信仰をドイツ語で《我らみな一なる神を信ず Wir glauben all an eynen gott》と歌う³³⁾
- [典礼のサンクトゥス(感謝の賛歌)定式の代わりに]ドイツ語サンクトゥス [《預言者イザヤにこれが起こった Jesaia dem propheten das geschach》] または歌《神に賛美とあれ Gott sey globet》かフス Jan Hus (ca. 1369–1415)の歌《我らの主、イエス・キリスト Jhesus Christus unser heyland》³⁴⁾
- [聖体拝領の間に]上の歌の残りかドイツ語アニュス・デイ³⁵⁾

『ドイツ・ミサ』では、聖書朗読時にも節をつけて歌うよう提案されている。使徒書朗読には教会旋法の第8旋法、福音書朗読には第5旋法が用いられ、福音史家はAの音(イ音)、キリストはその3度下のF(ヘ音)、その他の登場

30) ルターが1525年に書いた『ドイツ・ミサ』の草稿と、1526年の印刷稿では、旋律が異なるところがある。印刷稿はヴァルターの書いた旋律と考えられる。Leaver 2017, p. 255.

31) WA 19, S. 80. „Zum anfang aber singen wyr eyn geystlich lied odder eynen deutschen Psalmen ynn primo tono auff die weyse wie folget.“

32) WA 19, S. 90. „Auff die Epistel singet man eyn deutsch lied: ‘Nu bitten wyr den heyligen geyst’, odder sonst eyns, und das mit dem gantzen Chor.“

33) WA 19, S. 95. „Nach dem Evangelio singt die gantze kirche den glauben zu deutsch: Wir glauben all an eynen gott.“

34) WA 19, S. 99. „Und die weyl singe das deudsche sanctus odder das lied: Gott sey globet oder Johans Hussen lied: Jhesus Christus unser heyland.“

35) WA 19, S. 99. „Darnach segene man den kilch und gebe den selbigen auch und singe, was ubrig ist von obgenanten liedern oder das deutsch Agnus dei.“

人物は福音史家より3度上のC（ハ音）を中心に歌うものとして、譜例が挙げられている³⁶⁾。宗教改革前の教会では、聖週間のみ登場人物ごとに音高を変えて歌い、それ以外の礼拝ではシンプルな定式で歌っていたが、ルターは音高の区別を一年中の礼拝に適用したのだ。また、宗教改革前のミサではラテン語で会衆に聞こえないように、小声でささやかれる部分の多かった聖餐式制定の言葉 *Verba Testamenti* を、ルターは民衆語で会衆に聞こえるように朗唱するものとし、福音書朗読と同じ節回しをあてた³⁷⁾。このように、音高を変えて歌うことで、低い声で歌われるイエスの言葉に会衆が注目するように導く、教育的な目的もあったようだ³⁸⁾。

ドイツ語礼拝についてより詳しく記された1533年の『ヴィッテンベルク教会規則』には、このほかに会衆が歌うものとして季節ごとのセクエンツィア（続唱）が挙げられている³⁹⁾。これらは、各節の終わりに「キリエライス *Kyrieleis*」と歌われるので、ライスまたはライゼと呼ばれた。クレド（信仰宣言）の部分では、福音書朗読の後、聖職者が „*Credo in unum Deum*“（私は唯一の神を信じます）とラテン語で歌い、生徒たちの合唱が „*Patrem omnipotentem*“（全能の神である父を信じます）とラテン語で歌った後、会衆はドイツ語で „*Wir glauben alle an einen gott*“（我らみな唯一の神を信じます）と続ける。つまり、ラテン語とドイツ語が混じったかたちでクレドが歌われた。『ドイツ・ミサ』ではドイツ語の歌を歌う主体について、一か所で「全教会が歌う ... *singt die ganze kirche*」⁴⁰⁾とあるものの、他は主語が「人 *man*」あるいは「我々 *wir*」となっていて会衆が歌うのかどうか明らかではない。また、会衆の参加について、『ヴィッテンベルク教会規則』にも上記の程度しか書かれて

36) WA 19, S. 87-94.

37) WA 19, S. 97-99.

38) Leaver 2017-1, p. 192.

39) Küster 2016, S. 23-24. クリスマスから四旬節までは《誉められよ、イエス・キリスト *Gelobet seist du, Jesu Christ*》、復活祭から昇天祭までは《キリストはよみがえり *Christ ist erstanden*》、聖霊降臨節には《いま我ら聖霊に祈らん *Nun bitten wir den Heiligen Geist*》が歌われた。

40) WA 19, S. 95.

いないため、宗教改革後すぐの頃は会衆が歌唱にあまり参加していなかったとする見方もあった。たとえばキュスター Konrad Küster は、ルターの礼拝と会衆歌がドイツ語を基本とするという後世の見方は誤っていると指摘している⁴¹⁾。しかし、ヴィッテンベルクでなかなか出版されなかったと考えられていた会衆用の賛美歌集が1524年頃に出されていたと考えられるようになっており(後述)⁴²⁾、宗教改革後初期から会衆は礼拝で多くの歌唱に参加していたと考えられる。いずれにせよ、信者ひとりひとりが神に向き合うこと(万人司祭)を重視し、そのなかで礼拝において俗語であるドイツ語の使用を認めたこと、会衆が受動的に聞くのみならず一緒に歌うという方向を定めたことには意義があるだろう。そして、この方向が後の時代に続いていくことになる。重要なのは、ルターがこういった変化を強制しなかったことである。『ドイツ・ミサ』では、「すでによい順序をもっているかあるいは神の恩恵によってさらによくできる者が、それを捨てて我々に屈服することを望まない。全ドイツがすぐに我々のヴィッテンベルクの順序を採用する必要はないというのが私の意見だからである」⁴³⁾と記している。ルターは、都市と小さな集落では状況が異なることなどにも合わせて臨機応変に対応していった。ドイツ語礼拝、ドイツ語歌唱とも、ルターが初めて提唱したわけではないが⁴⁴⁾、こういったルターのバラ

41) Küster 2016, S. 19.

42) Leaver 2017-2, pp. 107-108.

43) WA 19, S. 73. „Doch will ich hiemit nicht begeren, das die ienigen, so bereyt yhre gute ordnung haben oder durch Gottis gnaden besser machen können, die selbigen faren lassen und uns weychen. Denn es nicht meyne meynunge ist, das gantze deutsche land so eben müste unser Wittembergische ordnung an nehmen.“

44) 1521年のクリスマスに、ルター不在時のヴィッテンベルクでカールシュタット Andreas Rudolf Bodenstein (genannt: Karlstadt) (1486-1541) が最初のドイツ語でのミサを行った。カールシュタットは1521年夏に『グレゴリオ聖歌討論 Decantu Gregoriano disputatio』を出版し、カトリックの典礼音楽をラディカルに批判し、ドイツ語による歌の斉唱のみを認めた。カンツ Kaspar Kantz (ca. 1483-1544) は1522年にドイツ語による礼拝規則を出版した(『福音主義のミサについて Von der ev. Mesß』)。また、ミュンツァー Thomas Müntzer (ca. 1489-1525) は1523年にドイツ語歌集、1524年にドイツ語の礼拝規則を出版している(『ドイツ語の福音主義ミサ Deutsch-Euangelisch Mesze』)。

ス感覚によって、ルター派教会ではじつくりと長もちのする改革が浸透していったのではないだろうか。

また、ルターは教会で生徒たちの合唱を聴かせたほか、楽器の使用を認めた。ルターは、エリシャ Elischa (9. Jh. v. Chr.) が預言をするにあたって樂を奏する者を求めたこと（『列王伝下』第3章15節）、ダヴィデが豎琴を自分の誉れと喜びであると考えていたこと（『詩編』第57編9節）などを引き合いに出し、全ての聖人は『詩編』と弦楽器演奏で快活さを得たと記している⁴⁵⁾。また、『詩編』第149編に関連して、弦楽器は歌の助けになるものであり、音楽家はオルガン、シンフォニア、ヴァージナル、レガル⁴⁶⁾その他の楽器を用いて、父なる神の賛美のために歌い演奏するよう記している⁴⁷⁾。『ドイツ・ミサ』でも、「[キリスト教の信仰が広まるように、聖書を] 読み、歌い、説教し、執筆し、詩作しなければならないし、その助けとなり、利益となるならば、私はそのためにすべての鐘を鳴らし、すべてのオルガンを響かせ、鳴るものすべてを鳴らしたい⁴⁸⁾」と記している。ルターにとって、楽器は神の賛美に重要な役割をもつものだった。これは、同時期にスイスで宗教改革を行ったツヴィング

45) WA Briefwechsel 7, S. 78. „... wie Elisäus sich ließ durch seinen Psalter erwecken, 2 Kön. 3, und David im Psalter selbst sagt Ps. 57, seine Harfe sei seine Ehre und Freude: Exurge, gloria mea, exurge, Psalterium et Cithera, und alle Heiligen machen sich fröhlich mit Psalmen und Saitenspielen.“

46) ヴァージナルはチェンバロの仲間、レガルはオルガンの仲間の楽器である。リーヴァーは、シンフォニアを、2つ以上の音を同時に出せる各種の楽器と考えている。Leaver 2017, p. 383. 一方、WA 48, S. 86 では、シンフォニアはチェンバロのことと記されている。

47) WA 48, S. 85-86 (Nr. 116). „Solch new Lied sollen auch des folgenden psalms Seitenspiel helfen singen. Und Wolff Heinz auch beide mit seiner Orgeln, Symphonien, Virginal, Regal, und was der lieben Musica mehr ist, Davon (als seer newer kunst und Gottes gaben) weder David noch Salomon, noch Persia, Grecia noch Roma ichts gewust, sein singen und spielen mit freuden gehen lassen, zu lob dem Vater aller gnaden.“ [ichts = etwas]

48) WA 19, S. 73. „... umb solcher willen mus man lesen, singen, predigen, schreyben und tichten, und wo es hulflich und sodderlich dazu were, wolt ich lassen mit allen glocken dazu leutten und mit allen orgeln pfeyyffen und alles klingen lassen, was klingen kunde.“

り Huldrych Zwingli (1484-1531) やカルヴァン Jean Calvin (1509-1564) が、礼拝での合唱や楽器の使用を禁じ、当初、単声で聖書の『詩編』を歌うことだけを認めたのと対照的である⁴⁹⁾。

2. ルター派の賛美歌

次に、ルター派のドイツ語による賛美歌に注目して論じたい。ルターが最初に書いた歌は、《新しい歌を始めよう Ein neues Lied wir heben an》だ。これは、1523年7月1日にブリュッセルでルターの教えに沿って活動していた修道士2名（フォス Hendrik Vos とファン・エッシェン Johannes van Esschen）が異端の宣告を受け、火あぶりの刑にあったという知らせを聞いて書かれた10節のバラードで（のちに12節に拡大）、ビラに印刷されて配られた（ビラは現存しない）。このときルターは、「誰かがこの聖なる福音のゆえに拷問にかけられるなら自分がその最初の人物になると思っていたが、私はそれに値しなかった」と述べて悲しんだという⁵⁰⁾。現代においては、音楽が何長調で書かれているとか、何短調で書かれているとか言うが、長調・短調という音組織が確立するのは1600年頃のこと、ルター時代の音楽は、教会旋法という音組織で考えるのが一般的である。この歌は、教会旋法でいうイオニア旋法で書かれているが、使われている音は現在の長調と同じで、明るい響きがする。響きのうえでも、タイトル通りの「新しい歌 neues Lied」だと言えよう⁵¹⁾。ただ、この歌は起こった出来事を伝えて信仰に導くものであり、賛美歌集に印刷されたが、もともとは礼拝に集った会衆が歌うために書かれたものではない⁵²⁾。

49) 1586年にヴェルテンベルクのルター派のアン Dre Jacob Andreae (1528-1590) は、メンベルガルト Montbéliard でカルヴァン派の主導者たちとこの問題を話し合った。Küster 2016, S. 47.

50) Geck 2017, S. 11.

51) 形式的には、マイスターゲザングの流れをくむ伝統的なパウル形式（AAB形式）をとる。パウル形式では、前半部の旋律が繰り返されるので、会衆にとって覚えやすいという利点がある。

52) Geck 2017, S. 18. 1524年のヴァルターの賛美歌集では、テノールに定旋律を置く

なお、この歌の第1節2行目には、ニュルンベルクのマイスタージンガーとして知られるハンス・ザックス Hans Sachs (1494-1576) の詩『神が認めてくださる Das Walt got』のタイトルが „des wald got“ のかたちで引用されており、ルターがザックスの詩を知っていたことがうかがえる。このザックスの詩は、ルターの神学をうたった最初期の例であり、これを拡大するかたちでザックスは『ヴィッテンベルクのナイチンゲール Das Wittenbergische Nachtigall』という700行もの詩にルターのことを詠んでいる（手稿は1523年7月8日付）。宗教改革を始めたルターを、歌で新しい一日の始まりを告げるナイチンゲールにたとえており、ルター自身、それを意識して《新しい歌を始めよう》で引用を行ったのだろう。賛美歌詩を書くうえでは、ルターがラテン語の詩の分析や模倣の教育を受けていた⁵³⁾ことが役に立ったようだ。

同じ1523年には《いざ喜び、愛するキリストの徒よ Nun freut euch, lieben Christen g'mein》も書かれ、ビラに印刷され、「罪人はいかにして恵みに至るかの、素晴らしくも霊的な歌」として知られるようになり、ルターの教えを広めるのに役立ったという⁵⁴⁾。プレトリウス Michael Praetorius (1571-1621) は、1615年の『音楽大全 Syntagma musicum』でこれを「ドイツの黄金の歌」とも言っている⁵⁵⁾。これら2つの最初期の賛美歌は、ともに印刷されたビラという当時のマスメディアを活用して広められた。ゲーテンベルクが活版印刷を始めたのが1445年以前とされるが、楽譜は普通の手物より印刷の手間がかかるため⁵⁶⁾、楽譜印刷はそれよりだいぶ遅れて、1500年前後から本格的に始まった。ルターは、生まれて間もない楽譜印刷というメディアをうまく使ったと言える。1524年5月6日に、貧しい裁縫師の老人がマクデブルクの広場でルター

4声合唱として作曲された。また、1529年にヴィッテンベルクで出された賛美歌集では、教理問答歌の最後に置かれているが、現在のドイツのルター派教会で用いられている賛美歌集(EG)には載せられていない。

53) Leaver 2017-2, p. 60.

54) 徳善、2017年、93~103頁。

55) Geck 2017, S. 36.

56) 初期の楽譜印刷では、譜線と音符と歌詞を別々に刷る3度の工程になっていた。

の賛美歌《神は我らに慈しみ深く Es wolle uns Gott gnädig sein》や《深き悩みの淵より Aus tiefer Not》を歌って多くの聴衆をひきつけ、そのために収監されたという記録がある。この裁縫師は、単に歌っただけではなく、楽譜のビラを売っていたことが分かっており⁵⁷⁾、ビラが賛美歌の伝播に役立っていたことがうかがえる。

ルター以前にも、礼拝以外で歌うドイツ語の宗教的な歌曲はあった⁵⁸⁾。また、ドイツ農民戦争で知られるトマス・ミュンツァー Thomas Müntzer (ca. 1489–1525) が、ルター以前からラテン語の聖歌のドイツ語訳などを作っていたが、ルターはミュンツァーのドイツ語訳に賛同できず、自らドイツ語賛美歌を書いたとも考えられている⁵⁹⁾。実際にミュンツァーとルターが同じラテン語の聖歌をドイツ語にしている待降節の歌を比較してみると（【資料1】）、たとえばミュンツァーでは「救世主 Erlöser」という語の3つの音節のうちアクセントがある第2音節が、低い音になっている。また、「神の創られたもの Kreatur」では、アクセントのない „a“ の音節が高い音になって強調されている。音楽では大切な語、強調する音節などに高い音をあてると効果的なことが多いので、これら2語はその原則に反した書き方になっている。一方、ルターの賛美歌では、「異邦人 heyden」、「救い主 Heyland」のアクセントが第1音節にあるなどが活かされて、言葉が自然に音楽に乗せられている⁶⁰⁾。ミュンツァーはラテン語聖歌にない音を1つ加えているだけだが、ルターはドイツ語に合わせて旋律もだいぶ変えている。【資料1】では、対応する音が大体縦になるように書いているので確認していただきたい⁶¹⁾。ルターの賛美歌では、最初の行（第1

57) Leaver 2017-2, p. 90.

58) Leaver 2017-2, pp. 69-70 に例が挙げられている。

59) Marshall and Leaver 2001, p. 738.

60) 《いざ来ませ、異邦人の救い主 Nun komm, der Heiden Heiland》と《来たれ聖霊、主なる神 Komm, Heiliger Geist, Herre Gott》と《キリストをほめたたえよう Christum wir sollen loben schon》の3曲をミュンツァーに対する批判の意味で作ったと、ジェニーは述べている。Jenny 1985, S. 12.

61) ルターは同じラテン語聖歌をもとに4つのドイツ語賛美歌を作っており、Leaver 2017-1, p. 201 にそれらの旋律を比較した譜例が挙げられている。

【資料1】 ミュンツァーとルターの賛美歌

テノール
Ve-ni re-demp-tor gen-ti-um o-sten-de par-tum vir-gi-nis

ミュンツァー
O Herr, er-lö-ser al-les volcks kum zeyh uns die ge-burt deyns sons

ルター
Nu kom der hey-den Hey-land der jung-fra-wen kind er-kand

mi-re-tur om-ne sae-cu-lum ta-lis par-tus de-cent De-um
es wun-dern sich all cre-a-tu-ren das Christ al-so ist mensch wor-den

Das sich wun-der al-le Welt Gott solch ge-burt yhm be-stelt

行)と最後の行(第4行)の旋律が同じにされていて、歌いやすく、覚えやすくする工夫もなされている。

ルターは、1523年の『ミサと聖餐の原則』で「私は、グラジュアル[グラドゥアーレ]につづいて、またサンクトゥスやアグヌス・デイにつづいて、会衆がミサの間に歌いうる、できるだけ多くの自国語の歌がほしい」⁶²⁾、「しかし、

62) 徳善、2012年、454頁。WA 12, S. 218. „Cantica velim etiam nobis esse vernacula quam plurima, quae populus sub missa cantaret, vel iuxta gradualia, item iuxta Sanctus et Agnus dei“ シュペラートゥス Paul Speratus (1484–1551) によるドイツ

私たちは詩人に欠けており、神の教会でいつも用いられるだけの価値がある敬虔な霊の歌を私たちのために作ることのできる人々が知られていない。(中略)もしも、だれかドイツの詩人がいるならば、彼らが刺戟されて、私たちのために信仰の詩を作ってくれるように望んで、私はこう言っているのである⁶³⁾、「讚美歌とテ・デウム・ラウダムスは、解説と説教のあとの『神に感謝せん(デオ・グラティアス)』と同様、彼らが神をほめたたえ、神のことばの啓示された真理に感謝をささげていることを立証している。私はこの種のもので、私たちの自国語の歌があればと願っている⁶⁴⁾と記している。

ドイツ語の歌が必要だが詩人が見つからないという切羽詰まった状況のなかで、ルターはみずから率先して本格的にドイツ語賛美歌を作り始める。はじめに重点的に取り組んだのは、聖書の『詩編』の歌と教会暦ごとの歌だった。修道士は、毎日の聖務日課(時課)で『詩編』を歌い、唱える。全部で150編ある『詩編』を毎週1回は歌うほど、詩編は修道士の信仰と生活の一部になっていたという⁶⁵⁾。しかし、『詩編』をラテン語でカトリックの「詩編唱定式」で歌うには相当の練習が必要で、一般民衆には難しいため、ルターはドイツ語の韻律詩にしたいと考えたようだ⁶⁶⁾。ルターは1523年の暮れに、『詩編』を逐語訳ではなく、新しい宮廷言葉は避けて民衆に分かりやすい言葉で、内容がはっきり伝わるようなドイツ語にしてほしいと、ザクセン選帝侯の宮廷説教師だったシュパーラティーン Georg Spalatin [Georg Burkhardt] (1484-1545) らに協力を求めた⁶⁷⁾。ちなみに、カルヴァン派の『ジュネーヴ詩編歌』では、ラテン語からフランス語に、なるべく違いのないように逐語訳されており⁶⁸⁾、訳のコン

語訳： „Ich wollt auch, daß wir viel deutsche Gesänge hätten, die das Volk unter der Messe sänge oder neben dem Gradual und neben dem Sanctus und Agnus.“

63) 徳善、2012年、454頁。

64) 徳善、2012年、456頁。

65) 徳善、2017年、39頁。

66) Rödding 2015, S. 52. Heimrath und Korth 1983, S. 32にも、グレゴリオ聖歌のメリスマティックな旋律は素人には歌いにくいのでシラビックな作曲法にしたとの記述がある。

67) WA Briefwechsel 3, S. 220.

68) Rödding 2015, S. 55.

セプトがまったく異なる。最初に出された『詩編』にもとづくドイツ語賛美歌は《深き淵より Aus tiefer Not》で、1524年に印刷された。ルターは、1524年のうちに『詩編』にもとづく賛美歌をほかに5曲書いている⁶⁹⁾。

ルターの賛美歌が最も多く出版されたのは1524年で、24曲が出版された⁷⁰⁾。ルター派賛美歌集の歴史は、この1524年に始まる。この年には、現在に伝わる3種類のルター派賛美歌集が出版された。もう500年近く前のことであり、資料の消失などのため分からないことが多いが、ルター派の最初の賛美歌集とされる『八歌集 Achtliederbuch / Etlich Cristlich lider Lobgesang vñ Psalm』⁷¹⁾は、ニュルンベルクのヨプスト社 Jobst で3刷（あるいは3種類の稿）が出され、アウクスブルクでもすぐに増刷されたと考えられている。この賛美歌集には、通称の通り8曲の賛美歌が収められており、そのうちルターの賛美歌は4つである。これら8曲は、ビラで流布していた賛美歌を集めて出版されたとも推測されている⁷²⁾。曲集の1曲目は、1523年にビラに刷られたと上述した《いざ喜べ、愛するキリストの徒よ Nun freut euch lieben Christen g'mein》である。【資料2】を見ていただくと分かるように、楽譜と歌詞は別々になっており、現代の楽譜のように音符の下に歌詞が振られているわけではない。2段の楽譜の間には歌詞冒頭がタイトルのようなかたちで印刷されており、同じ歌詞冒頭部分は楽譜の下にも印刷されている。また、白譜定量記譜法を用いており、音符の形が現代のものとは異なるほか、小節線も引かれていない。『八歌

69) ルター以外の4名の歌をあわせて、はじめに10の『詩編』にもとづく賛美歌が用意された。その一覧が Leaver 2017-2, p. 76 に挙げられている。なお、修道院の聖務日課では1週間ですべての『詩編』が歌われていたが、ドイツ語化されていない『詩編』が多かったため、引き続きラテン語で詩編唱定式で歌われた。Leaver 2017-1, p. 246.

70) 1523/4年の歌は大きく分けて3種あり、詩編歌、教理問答歌、教会暦の歌に分けられる。Geck 2017, S. 62.

71) 初版譜のデジタル資料が <http://diglib.hab.de/wdb.php?dir=drucke/236-3-quod-2s&pointer=20> で公開されている (Wolfenbütteler Digitale Bibliothek, 2018年2月7日参照)。

72) Leaver 2017-2, p. 95.

【資料2】『八歌集』より《いざ喜べ、愛するキリストの徒よ
Nun freut euch lieben Christen g'mein》

Ein Christenlichs Lied Doctors
Martin Luthers/die unaußsprechliche
gnaden Gottes vnd des rechten
Glaubens begreiffend.



Nun freut euch lieben Christen g'meyn.

¶ Nun freut euch lieben Christen g'mein/ Vnd laßt vns selb-
lich springen/ Das wir gerofft vnd all in ein/ Mit lust vnd
liebe singen/ Was got an vns gewendet hat/ Vnd sein süß
wunder that/ Gar thut hat es erworben.

¶ Dem Teuffel ich gefangen lag/ Im todt war ich verlossen/
Mein sündt mich queller macht vñ tag/ Darin ich war ge-
boren/ Ich viel auch ymmer tieffer dein/ Es war kein güts
am leben mein/ Die sündt hat mich besessen.

¶ Mein güte werck die golden nicht/ Es war mit in verber-
ben/ Der frey will haßet gods gerichte/ Er war zum güte er-
stoben/ Die angst mich zu verzweiffeln treyb/ Das mich
dann stecken bey mir fleyß/ Zur heilen miß ich sincken.

¶ Do inßert Got in ewigkait/ Mein elend vber massen/ Er
dacht an sein barmherzigkeit/ Er wolt mir helfen lassen/
Er wandt zu mir das vater heyt/ Es war bey jm fürwar
kein schertz/ Er lief sein bestes kosten.

¶ Er sprach zu seinem lieben son/ Die zeit ist hie zur barmen/
Far hyn meins bergen werde from/ Vnd sey das hayl dem
armen/ Vnd hilf jm auß der sünden not/ Erwürge für jm
den pitzen todt/ Vnd laß jm mit die leben.

¶ Du sin dem vater geborsam waert/ Er kam zu mir auff
erden/ Von einer juncfraw rain vñ zart/ Er solt mein beü-
der werden/ Gar hämlich siert er sein gewalt/ Er gieng in
meiner armen gestalt/ Den teuffel wolt er fangen.

¶ Er sprach zu mir halt dich an mich/ Es sol dir ygt gelin-
gen/ Ich ged mich selber gang für dich/ Da wil ich für dich
ringen/ Dañ ich sin dein vñ du bist mein/ Vnd wo ich fleyß
soln sein/ Ans sol der sündt nicht scheyden.

¶ Vergessen wüde er mir mein plüt/ Darz mein leben rau-
ben/ Das leyde ich alle dir zu güd/ Das halt mit festem glau-
ben/ Den todt verschlingt das leben mein/ Man vñ schuld
trege die sünden dein/ Da bistu selig worden.

¶ Gen hymel zu dem vater mein/ Far ich vß diesem leben/ Da
wil ich sein der maister dein/ Den geyst wil ich dir gods/ Der
dich in traktumf reisten sol/ Vnd lernen mich erkennen wol/
Vnd in der warheit leyren.

集』では、5~7曲目に『詩編』にもとづくルターの歌が3曲含まれる⁷³⁾。

ところで、現代の賛美歌集には、詩人と作曲者の名前が書かれているが、この賛美歌集には、詩人の名前は書いてあっても、旋律作者の名前は書かれていない。当時の賛美歌詩人は単に有節の韻律詩を書いて終わりではなく、その賛美歌の詩が歌われることを想定し、歌いながら書いたと考えられる。既存の旋律を手直しして使うこともあった。他に旋律作者が知られておらず、既存の歌の旋律を借用したのでもなければ、初期は詩と同じ人が旋律を書いたと考えられる⁷⁴⁾。詩と旋律の結びつきは絶対的なものではなく、同じ旋律に別の詩をつけることもあり、詩に対して第2の旋律がつけられることもあった。既存の旋

73) 《ああ神よ、天よりご覧になり Ach Gott, vom Himmel sich darein》と《愚者には巧言あり Es spricht der Unweisen Mund wohl》と《深き悩みの淵より Aus tiefer Not schrei ich zu dir》。

74) Jenny 1985, S. 14.

律を使っていたり、他者が作曲していたりしても明記されていないため、作詞者がルターと記されている賛美歌でも、旋律の作者を見極めるのは難しく、絶対にルター作の旋律と言えるのは2曲に限られる⁷⁵⁾。ルターの個人様式の分析をした人も多数いるが、スタイルから旋律の作者を決定づけることまではできない⁷⁶⁾。

次に、『エアフルト綱要 Erfurter Enchiridion / Eyn Enchiridion Oder handbüchlein / eynem ytzlichen Christen fast nutzlich bey sich zuhaben / zur stetter vbung vnd trachtung geystlicher gesenge / vnd Psalmen / Rechtschaffen vnd kunstlich verteutscht』と呼ばれる賛美歌集が、1524年にエアフルトの2つの出版社からほぼ同じ内容で出版された。レルスフェルト Johannes Loersfelt (fl. 1525-1528) が先に出版し、マーラー Mathes Maler [生没年不詳] の歌集は基本的にレルスフェルトの写しだが、載せている順序や内容に少し違いがある⁷⁷⁾。ともに26の歌詞を掲載しており、そのうち18がルター作である。旋律はレルスフェルトが16曲分、マーラーが15曲分を載せている⁷⁸⁾。この賛美歌集は、一般民衆の礼拝用ではなかったようだ。というのも、礼拝で使う重要な歌が入っていなかったため⁷⁹⁾。上層階級のほかに学校が購入しており、特に教育用という意味合いが強かったようだ。『エアフルト綱要』の表紙には、「若者の教育のため」と特記されている⁸⁰⁾。なお、この頃の賛美歌集1冊は雌牛

75) 《天にまします我らの父よ Vater unser im Himmelreich》には自筆譜が残っており、《預言者イザヤにこれが起こった Jesaja, dem Propheten, das geschah》についてはヴェルターの証言がある。

76) Jenny 1985, S. 15.

77) アーメルン Konrad Ameln は、レルスフェルトはオリジナル手稿譜から作成し、マーラーはレルスフェルトの校正刷から作成したと推測している。Ameln 1983-1, S. 9.

78) Ameln 1983-1, S. 3-4. マーラーは《深き悩みの淵より Aus tiefer Not》の旋律を載せていない。なお、レルスフェルトは、1曲(《来たれ聖霊、主なる神 Kom heyliger geyst herre Gott》)の楽譜でのみ音符の下に歌詞をつけている。

79) また、会衆歌としては主語が「私たち wir」になることが多いが、初期の賛美歌には主語が「私 ich」のものが多いことをゲックは指摘している。Geck 2017, S. 36.

80) Ameln 1983-1 [ページ番号なし]. „Mit disen und der gleichen Gesenge soltt man bilbyllich die yungen yugendt aufferziehen.“

1 頭と同じ値段だったという⁸¹⁾。

また、1524年には、ザクセン選帝侯の音楽家で『ドイツ・ミサ』の協力者として先ほど名前を挙げたヴァルターによる『合唱賛美歌集 Chorgesangbuch / Geystliche Gesangbüchlein』も出版された。これは、ヴィッテンベルクで印刷された現存最古の賛美歌集である。ヴァルターは、1529年にトルガウで初めてのルター派教会音楽家であるカントルになった人物だ。『八歌集』と『エアフルト綱要』が単旋律の賛美歌として出版されたのに対し、このヴァルターの賛美歌集は3パートから5パートの合唱用に入れられ（ルターは序文に「4 vier stimme」と書いている）、パート譜のかたちで出版された。当時、礼拝に集まった素人の会衆がこういった多声音楽を歌うことは考えられない。この合唱曲集はラテン語学校の生徒などが礼拝中に歌うものとして出されたもので、ルターはこの曲集のタイトルページに、やはり若者の教育のためと書いている⁸²⁾。ラテン語のモテット5曲のほかに、ドイツ語賛美歌が全部で43曲含まれ、そのうちルターの書いた歌詞は24種類29曲分である（同じ歌詞に別の付曲がなされているものがある）。この歌集で初めて出版されたルターの歌詞が8つあり、《深き悩みの淵より Aus tiefer Not》は4節から5節に拡大された稿が初めて出された。なお、メインの賛美歌の旋律は、この時期、テノール・パートに置かれている。今は一番上のソプラノに賛美歌の旋律が置かれることが多いが、そのような書き方になったのは16世紀も終わり近く、1586年に出されたオジアンダー Lucas Osiander (1534-1604) の曲集あたりからとされる⁸³⁾。

81) Küster 2016, S. 43.

82) Walter 1979、テノール・パート譜の序文より。 „Vnd sind dazu auch inn vier stimme bracht / nit auß anderer vrsach / denn das ich gern wollte / die jugent / die doch sonst soll vnd muß inn der Musica vnd andern rechten künsten erzogen werden / etwas hette / damit sie der bul lieder vnd fleyschlichen gesenge loß würde / vnnd an derselben stat / etwas heylsames lernete / vnnd also das gute mit lust / wie den jungen gepürt / ingienge.“ 4声で作曲するという当時流行のやりかたを導入しており、現在の教会で、ポップスを使って若者を惹きつけようとしているのにも通ずるという指摘がある。Heimrath und Korth 1983, S. 35. なお、スイスの宗教改革者カルヴァンは多声音楽を禁止した。徳善、2017年、50頁。

83) Nettl 1967, p. 88 ほか。50曲からなるオジアンダーの曲集は、3声3曲、5声13曲、

この『合唱賛美歌集』にルターは序文こそ寄せているが、全体の構成にはあまり関わっていなかったと考えられている。従来、ヴィッテンベルクでは合唱隊用の賛美歌集が先行し、会衆用の歌集の出版は後回しにされたと考えられていた。そのことから、礼拝でも主に会衆ではなく合唱隊が歌っていたと考えられた。しかし、1526年にヴィッテンベルクで出版された歌集『ヴィッテンベルク綱要 Wittenberger Enchiridion / Enchyridion geistlicher gesenge und psalmen fur die Leyen, mit viel andern, denn zuvor gebessert』が1895年に見つかった。この歌集に含まれる42の賛美歌のうち32は、ヴァルターの『合唱賛美歌集』に含まれるのと同じ賛美歌である⁸⁴⁾。『ヴィッテンベルク綱要』は単声で記されており、生徒の合唱隊用ではなく会衆用の歌集と考えられる⁸⁵⁾。また、1526年の『ヴィッテンベルク綱要』は第3版であると考えられ、おそらく第1版はヴァルターの『合唱賛美歌集』と同じ32曲を含み、第2版で3曲が挿入され、第3版では終わりに付録のようなかたちで7曲が追加されたと推測されている⁸⁶⁾。つまり、第1版は、ヴァルターの『合唱賛美歌集』と並行して準備されたと考えられ、ヴィッテンベルクで宗教改革後早い時期から会衆が歌唱に参加していたことがうかがえる。なお、この『ヴィッテンベルク綱要』には聖務日課で歌われる『詩編』や『マニフィカト』等への言及もあり⁸⁷⁾、ミサのみならず聖務日課でも会衆がドイツ語で歌ったことが分かる。

1529年にヴィッテンベルクで出版された『クルーク歌集 Klugsches Gesangbuch / Geistliche lieder auff s new gebessert zu Wittemberg』は、ルター自身が曲の順番まで考えて出した会衆用賛美歌集であるとされる。印刷業者クルーク Joseph Klug (ca. 1490-1552) が出したこの1529年版は現在までに消失して

残りは4声である。

84) 旋律の稿が異なるものもある。Leaver 2017-2, pp. 111-115.

85) ドイツ語による初の会衆用賛美歌集はボヘミア兄弟会が1501年に出したものである。Jenny 1985, S. 36.

86) Leaver 2017-2, p. 108.

87) Leaver 2017-2, p. 105.

おり⁸⁸⁾、1533年版で伝わる⁸⁹⁾。現存する1533年版を見ると、全体は教会暦の歌、教理問答歌、韻律詩の『詩編』と典礼歌、古いドイツ語の賛美歌、様々な作者による新しい賛美歌から成っている。ルター自身の書いた賛美歌は前半に28曲が含まれる⁹⁰⁾。後半(82葉～)は主にルター以外の人の書いた賛美歌や聖書引用を歌詞とする歌だが、これらもルターが選んで配列したようだ。なお、この歌集では楽譜の下に1番の歌詞が印刷されているが、どの音符でどの音節を歌うのかといった詳しい対応関係までは示されていない。1526年の『ヴィッテンベルク綱要』に含まれていた42の賛美歌のうち35がとり入れられ、ルター作《我らの神は堅き砦 Ein feste Burg ist unser Gott》などが新たに加えられ、全体は50曲で構成される。これは、1528年にツヴィッカウで出された会衆用賛美歌集が約70曲を含むのと比べると少なく、網羅的な曲集とは言えない⁹¹⁾。なお、同時代の他の歌集には、ミュンツァーの賛美歌が含まれるが、ヴィッテンベルクの賛美歌集に含まれないのは、ミュンツァーのドイツ語詩に批判的だったルター自身の考えによると思われる。この歌集の初版は、2つの教理問答などと同じ年に同じフォーマットで出版された⁹²⁾。印刷業者のクルークはクラナツハ Lucas Cranach der Ältere (ca. 1472-1553)の印刷工房にいた人で、この賛美歌集は木版画で飾られており、挿絵入り歌集 *illustriertes Gesangbuch* の系譜のはじめに立つ賛美歌集とされている⁹³⁾。また、はじめに教会暦の歌を待降節から並べることなどは、この後の賛美歌集にも受け継がれており、この歌集がルター派賛美歌集の礎になったとも言える。ルター派の賛美歌

88) 1529年には内容の異なる2つの版が出されていたと考えられている。Leaver 2017-1, p. 248.

89) ファクシミリ版は、Ameln 1983-2。この1533年版は索引の途中までになっており、不完全な状態である。全体はおそらく192葉から成るが、1529年版は1854年の報告では160葉で構成され (Leaver 2017-2, p. 152)、1533年版で拡大されている。

90) ルターの名前のあるものが28である。ルターの名はないが現在ルター作と考えられているものが、ほかに前半に4、後半に3ある。

91) Leaver 2017-2, p. 154.

92) Jenny 1985, S. 37.

93) 1545年に出された『バプスト賛美歌集 Das Babstsche Gesangbuch / Geystliche Lieder』(Ameln 1988-2)もこの系譜に連なる歌集である。

集は次々と出版され、宗教改革後半世紀の間に 200 種が出されたという⁹⁴⁾。賛美歌は、今はオルガンなどの伴奏で歌われることが多いが、当時は会衆が歌うときにオルガン伴奏はなかった。複数の節から成る賛美歌は全節を歌うのが基本で、会衆は、ラテン語学校のある都市部では生徒たちの合唱と 1 節ずつ交代で、のちにオルガンとも交代して歌ったようだ⁹⁵⁾。ラテン語学校のない村の教会などでは、説教者が会衆を導入するかたちで歌ったと考えられる⁹⁶⁾。

ルターがいったい何曲の賛美歌や典礼歌を書いたかということについてだが、まず、歌詞については研究者ごとの数え方の違いによって、35 から 45 位までの範囲で様々な説がある⁹⁷⁾。ちなみに、現在のドイツの賛美歌集 (EG) に載っているルターの賛美歌は 37 である。【表 1】は、Leaver 2001 でルター作とされる 43 のドイツ語賛美歌・典礼歌の歌詞を列挙した表である。旋律については、作者がはっきり分らないものも多く、確実にルター作と言える旋律は 2 つと上で述べた。しかし、状況証拠等からルター作と考えられているものはもっと多い。また既存の旋律をもとにルターが賛美歌を作曲している場合、それを編曲とみなすか作曲とみなすかで違いがある。たとえば、作曲と編曲を区別して数えている Leaver 2001 の場合、ドイツ語のものは作曲が 23 (そのほかに疑作 1)、編曲が 13 (ほか疑作 1)、ヴァルターとの共作 4 となっている。上述のように当時の賛美歌集では、詩人の名前が書かれており、旋律に関してははっきりしないことも多いので、ここでは歌詞を基準に考える。

94) Marshall and Leaver 2001, p. 740.

95) Geck 2017, S. 68 および Nettl 1967, pp. 92-93. リーヴァーは、第 1 節を会衆と合唱隊がともにユニゾンで歌い、第 2 節を合唱隊が定旋律コラール・モテットののかたちで歌い、以後、交互に歌ったと述べている。Leaver 2017, p. 205.

96) Leaver 2017-2, p. 134.

97) たとえば、Smelik 2013 では 35、Stalman 2004 では 37、大角 2007 でも 37、徳善 2017 ではまえがきに「50 曲ほど」とあるが本文で言及されているのは 38、Leaver 2001 では 43 (加えて疑作 2)、Jenny 1985 では 45 である。また、ドイツのルター協会 (Luther-Gesellschaft e. V.) のホームページでは、「ルターの歌 Luthers Lieder」として 40 が挙げられているがそれですべてだとは記されていない。http://www.luther-gesellschaft.de/material/texte-zu-luther/luthers-lieder.html (2017 年 12 月 23 日閲覧)

【表1】 ルター作と考えられるドイツ語の賛美歌・典礼歌

歌詞冒頭 ⁹⁸⁾	歌詞初版 ⁹⁹⁾	旋律初版 ¹⁰⁰⁾	作曲者 ¹⁰¹⁾	旋律についての備考 ¹⁰²⁾
Ach Gott, vom Himmel sich darein	1524 (1523?)	1529/33 1524	Luther Walter	Zahn 4431 Zahn 4432a
Aus tiefer Not schrei ich zu dir	1524	1524	Luther	Zahn 4437
Christ ist erstanden		1529	A	Zahn 8584
Christ lag in Todesbanden	1524	1524	C	Zahn 7012
Christ unser Herr zum Jordan kam	1542	1524	Walter	= Es wolle Gott uns gnädig sein ¹⁰³⁾ Zahn 7246
Christe, du Lamm Gottes ¹⁰⁴⁾	1528	1528	Luther	Zahn 58
Christum wir sollen loben schon	1524	1524	A	Zahn 297
Der du bist drei in Einigkeit	1543	1545	A	Zahn 335
Dies sind die heiligen zehn Gebot	1524	1524	A	Zahn 1951
Ein feste Burg ist unser Gott	1529	1529	Luther	Zahn 7377a

98) 表では、歌詞冒頭（タイトル）の日本語訳を併記すると煩雑になるため、原語表記のみとする。ここでは、現代の一般的なドイツ語表記を用いる。

99) 歌詞初版の年代は、主に Stalman 2004, Sp. 640-642 にもとづく。ただし、『すべての異邦人よ、主を賛美せよ Lobet den Herren, alle Heiden』はルター協会のホームページによる。http://www.luther-gesellschaft.de/assets/pdf/lieder/lobet_den_herren_alle_heiden.pdf (2017年12月24日閲覧)

100) 旋律の初版年代は、主に Leaver 2001 にもとづく。

101) A とはルターが既存の旋律を転用したもの (adapt)、C とはヴァルターとの合作 (collaboration) を指す。その区別は、Leaver 2001 による。Leaver 2001 に旋律についての記載がない場合、空欄とする。

102) Zahn は Zahn 2006 の番号、Jenny は Jenny 1985 の番号である。

103) ヴァルターの 1524 年の『合唱賛美歌集』(Walter 1979) 第 10 曲の旋律に付曲。作曲者について、EG (第 202 番) とルター協会は疑問符つきでルターの名を挙げている。http://www.luther-gesellschaft.de/assets/pdf/lieder/christ_unser_herr_zum_jordan_kam.pdf (2017年12月23日閲覧)

104) シュタールマン Joachim Stalman は疑義があるとしている (Stalman 2004, Sp. 642)。

Ein neues Lied wir heben an	1523	1523	Luther	Zahn 7245
Erhalt uns, Herr, bei deinem Wort	1542	1543	Luther	Zahn 350
Es spricht der Unweisen Mund wohl	1524	1524	Walter	Zahn 4436
Es wolle Gott uns gnädig sein	1523	1524 1524	Luther Walter	Zahn 7247 Zahn 7246 = Christ unser Herr zum Jordan kam
Gelobet seist du, Jesu Christ	1524	1524	A	Zahn 1947
Gott der Vater wohn uns bei	1524	1524	C	Zahn 8507
Gott sei gelobet und gebenedeiet	1524	1524	A	Zahn 8078
Herr Gott, dich loben wir (Tedeum)	1529	1533	Luther	Zahn 8652
Ich dank dem Herrn (Psalm 111)		1533	Luther	Jenny 43
Ich will den Herrn loben		1526	Luther	Zahn -
Jesaja dem Propheten das geschah	1526	1526	Luther	Zahn 8534
Jesus Christus unser Heiland, der den Tod	1524	1524 1524 1524	Luther C Walter	Zahn 1978 Zahn 1977 Zahn 1976
Jesus Christus unser Heiland, der von uns	1524	1533 1524 ¹⁰⁵⁾	Luther A	Zahn 1577 Zahn 1576
Komm Gott, Schöpfer, Heiliger Geist	1524	1524/9	A	Zahn 294
Komm, Heiliger Geist, Herre Gott / Komm heiliger Geist, Herre Gott	1524	1524	A	Zahn 7445

105) Leaver 2001, p. 367 では 1533 年となっているが、初版は 1524 年である。

Kyrie eleison (Die deutsche Litanei)	1529	1529	Luther	Zahn 8651
Lobet den Herren, alle Heiden (Psalm 117)	1533	1533	Luther	Jenny 44
Mensch willst du leben seliglich	1524	1524	Walter	Zahn 1956
Mit Fried und Freud ich fahr dahin	1524	1524	Walter	Zahn 3986
Mitten wir im Leben sind	1524	1524	Walter	Zahn 8502
Nun bitten wir den Heiligen Geist	1524	1524	A	Zahn 2029
Nun freut euch, lieben Christen g'mein	1523	1524 1529/33 1524	Luther Luther Walter	Zahn 4427 Zahn 4429a = Es ist gewisslich an der Zeit Zahn 4428
Nun komm der Heiden Heiland	1524	1524	A	Zahn 1174
Nun lasst uns den Leib begraben	1542	1542	A	[Zahn 340] Jenny 40B
Sie ist mir lieb die werthe Magd	1535	1535	Luther	Zahn 8516
Vater unser im Himmelreich	1539 (1537?)	ca. 1538 1539	Luther A	Zahn 2562 Zahn 2561
Verleih uns Frieden gnädiglich	1529	1529	Luther	Zahn 1945
Vom Himmel hoch, da komm ich her	1535	1539 1541	Luther Walter	Zahn 346 Zahn 345
Vom Himmel kam der Engel Schar	1543			独自の旋律なし ¹⁰⁶⁾
Wär Gott nicht mit uns diese Zeit	1524	1524 1528	Walter Walter	Zahn 4434 Zahn 4435
Was fürcht'st du, Feind Herodes, sehr	1541	1541		Jenny 37
Wir glauben all' an einen Gott	1524	1524	C	Zahn 7971
Wohl dem, der in Gottes Furcht steht	1524	1524	Luther	Zahn 298

106) ジェニーは3種類の旋律を挙げている (Jenny 1985, S. 306-307)。

なお、Leaver 2017-1, 2 では、同じ著者が 2001 年に疑義のある作としていた《すべての榮譽と賛美は神のもの All Ehr und Lob soll Gottes sein》¹⁰⁷⁾ および《我らの大いなる罪と重い罪業 Unser große Sünde und schwere Missetat》が真作として扱われている¹⁰⁸⁾。

3. ルターの音楽観

以上に見てきたように、ルターは礼拝に会衆の歌う部分を導入し、賛美歌を自らつくり、賛美歌集を編纂した。このように音楽に積極的に取り組んだルターを支えた音楽観は、どのようなものだったのだろうか。ルターの残した言葉を手がかりに、探っていきたい。

ルターは音楽についての発言を多く残しており、なかでも音楽を神学の次に、あるいは神学と同じくらい重視するという意味のことを繰り返し述べている。たとえば、『桌上語録 Tischreden』には、「音楽を軽視すべきではない。M. ルター博士は『熱狂的な宗教家が皆そうするように、音楽を軽視する者は私は評価しない。なぜなら、音楽は神の賜物・贈物なのであり、人のつくったものではないからだ。音楽は悪魔を駆逐し、人々を朗らかにし、音楽を聴くと怒り、みだらな思い、傲慢さや他の悪徳を忘れる。私は音楽を神学に次ぐものとし、それに最高の称賛を与える』と述べられた」という記述がある¹⁰⁹⁾。1530

107) この作品の真純性については Ameln 1988-1 で論じられている。

108) Leaver 2017-1, S. 305-306. なお、ここには【表 1】に挙げた《私は主に感謝する Ich dank dem Herrn》および《私は主を賛美する Ich will den Herrn loben》は含まれない。また、Leaver 2001 にも Leaver 2017-1, 2 にも短い《キリエ・エレイソン Kyrie eleison》が含まれるが【表 1】には含めなかった。

109) WA Tischreden 6, S. 348 (Nr. 7034). „Die Musicam soll man nicht verachten. ‚Wer die Musicam verachtet, (sprach D. M. L.), wie denn alle Schwärmer thun, mit denen bin ich nicht zufrieden. Denn die Musica ist ein Gabe und Geschenke Gottes, nicht ein Menschen-Geschenk. So vertreibt sie auch den Teufel, und machet die Leut fröhlich; man vergisst dabey alles Zorns, Unkeuschheit, Hoffart, und anderer Laster. Ich gebe nach Theologia der Musica den nächsten Locum und höchste Ehre.“

年10月4日付の音楽家ゼンフル Ludwig Senfl (ca. 1486–1543)宛ての手紙では、「私は、神学のほかには、音楽と同列に置くことのできる芸術はないとおそれ主張しよう。なぜなら、音楽以外では神学だけがもたらすことのできるもの、つまり穏やかで朗らかな心を音楽はもたらしてくれるからだ。その朗らかな証拠は、悲しい心配事や不安にさせるような憂慮をもたらす張本人である悪魔が、音楽を聴くと、神学の言葉を聞いて逃げるのと同じように、ほぼ即座に逃げていくことだ」¹¹⁰⁾と説明している。

また、ルターは「音楽は最上の学問である」¹¹¹⁾、「音楽は最上の芸術である」¹¹²⁾と見なしている。「私は常に音楽を愛してきた」¹¹³⁾、「私は神学者になっていなければ、音楽家になっていただろう」、「音楽は、美しく優雅な神の賜物で、私の説教のインスピレーションとなった」¹¹⁴⁾とし、「音楽は私を元気づけ、重荷を取り除いてくれた」¹¹⁵⁾と感謝をあらわしている。『音楽 Frau Musica』という題の40行の詩を書いているほどである¹¹⁶⁾。この詩は、1538年のヴァルターの

110) Walch 1904, Sp. 1575. „[Ich] scheue mich nicht zu behaupten, daß nach der Theologie keine Kunst da sei, welche der Musik gleichgestellt werden könnte, weil sie allein nach der Theologie das zuwegebringen kann, was sonst allein die Theologie zuwegebringt, nämlich ein ruhiges und fröhliches Herz. Dafür ist ein klarer Beweis, daß der Teufel, der Urheber trauriger Sorgen und beängstigender Unruhe, bei der Stimme der Musik fast gleicherweise flieht, wie er flieht bei dem Worte der Theologie.“ (WA Briefwechsel 5, S. 635–640 [Nr. 1727].) 類似の記述には、以下のようなものがある。 „Musica maximum, immo divinum est donum, ideo Satanae summe contrarium, quia per eam multae et magnae tentationes pelluntur. Diabolus non expectat, cum ea exercetur.“ (WA Tischreden 1, S. 490 [Nr. 968].) „dass die Musica ein herrlich und göttlich Geschenk und Gabe sei, welche ganz feind sei dem Teufel, vnd man könne die tentationes (Versuchungen) vnd cogitationes (Phantasien) damit vertreiben; denn der Teufel erharret der Musik nicht gerne. Meae cantilenae thun dem Teuffel wee.“ (Rödding 2015, S. 32.)

111) WA Tischreden 2, S. 518 (Nr. 2545b). „Musica est optima scientia.“

112) WA Tischreden 2, S. 518 (Nr. 2545a). „Musica est optima ars.“

113) WA Tischreden 5, S. 557 (Nr. 6248). „Musicam semper amavi.“

114) Nettel 1967, p. 12 より引用。ネトルが出典として挙げている『音楽への賛辞 Encomium musices』(WA 50, S. 368–374)にはこの記述は見あたらない。

115) Lloyd 2007, p. 27 “[Music] has often revived me and relieved me from heavy burdens.”

116) 40行は、節に分けられず、ひとつながりに印刷されている。

出版譜の序文として印刷されたが、1534年の初期稿も知られる¹¹⁷⁾。

Fraw Musica

Vor allen freuden auff erden
 Kan niemand keine feiner werden /
 Denn die ich geb mit meim singen
 Vnd mit manchem süssen klingen /
 Hie kan nicht sein ein böser mut
 Wo da singen gesellen gut /
 Hie bleibt kein zorn / zanck / hass / noch neid
 Weichen mus alles hertzeleid /
 Geitz / sorg vnd was sonst hart an leit,
 Fert hin mit aller traurigkeit /
 Auch ist ein jeder des wol frey
 Das solche freud kein sünde sey /
 Sondern auch Gott viel bas gefelt
 Denn alle freud der gantzen welt /
 Dem Teuffel sie sein werck zerstört
 Vnd verhindert viel böser mörd /
 Das zeugt Daudid des Königs that
 Der dem Saul oft gewehret hat /
 Mit gutem süssem harffenspiel
 Das er nicht jnn grossen mord fiel /
 Zum Göttlichen Wort vnd warheit
 Macht sie das hertz still vnd bereit /
 Solchs hat Eliseus bekant
 Da er den geist durchs harffen fand /

音楽

この地上のすべての喜びのなかで
 これほど素晴らしいものはない、
 私の歌唱と
 甘美な楽器の響きが生み出す喜びより。
 悪い心など存在しえない、
 仲間が上手に歌うところには
 怒り、口論、憎しみ、妬みは居座りはせず
 心痛はみな消え去るに違いない。
 強欲、不安、その他の辛い悩みは
 あらゆる悲しみとともに走り去る。
 人は誰しも自由に喜んでよいのだ
 音楽のもたらす喜びは罪ではなく
 神の御心にもかなうのだから、
 世界中のどんな喜びにもまして。
 その喜びは悪魔の業を破壊し、
 邪悪な人殺しの多くをはばむ。
 ダヴィデ王の行いはそれを明白に示す。
 ダヴィデはサウルをたびたび
 甘美で巧みな豎琴の演奏で悪魔から守り
 大いなる死に陥らないようにした。
 神の御言葉と真実にかなうように
 その喜びは心を静かにし、備えさせる、
 エリシャの心のように。
 エリシャは豎琴によって霊を見出したのだ。

117) Leaver 2017-1, p. 73.

Die beste zeit im jar ist mein	一年で最高の季節は私のもの
Da singen alle Vögelein /	小鳥はみな歌い
Himel vnd erden ist der vol	天も地も小鳥たちでいっぱい
Viel gut gesang da lautet wol /	いい歌がたっぷりと響いている。
Voran die liebe Nachtigal	とりわけ愛しいナイチンゲールは
Macht alles frölich vberal /	どこでもあらゆるものを楽しませる、
Mit jrem lieblichem gesang	その愛らしい歌で。
Des mus sie haben immer danck /	それゆえナイチンゲールはいつも感謝される。
Vielmehr der liebe HERRE Gott	愛する主なる神は言うまでもない。
Der sie also geschaffen hat /	神はナイチンゲールを
Zu sein die rechte Sengerin	ふさわしい歌い手、
Der Musicen ein Meisterin /	音楽の名手とすべくお創りになった。
Dem singt vnd springt sie tag vnd nacht	ナイチンゲールは主なる神のために昼も夜もとんで歌い
Seines lobs sie nichts müde macht /	飽かず賛美を捧げる。
Den ehrt vnd lobt auch mein gesang	私の歌も主なる神に敬意を表し、賛美し
Vnd sagt jm ein ewigen danck.	いつまでも感謝を捧げる ¹¹⁸⁾ 。

聖書との関係については、「福音は音楽を通して語られる」¹¹⁹⁾ものであり、「神の御言葉は、説教されるだけではなく歌われるべきだ」¹²⁰⁾との見解をルターは示している。また、歌うことは信仰の表現であり、「他の人にも聴こえるように喜びをもって歌い伝えなさい」¹²¹⁾と言っている。

118) Walter 1938 [頁番号なし]。「すべてのよい賛美歌集の序文 Vorrhede auff alle gute Gesangbücher D: M: L:」という見出しの後に、この詩が印刷されている。この詩の日本語訳にご助言くださった獨協大学ドイツ語学科山本淳教授に御礼申し上げます。

119) WA Tischreden 2, S. 11-12 (Nr. 1258). „Sic deus praedicavit euangelium etiam per musicam, ut videtur in Iosquin.“(So hat Gott das Evangelium auch durch die Musik gepredigt, wie man an Josquin sieht.)

120) Fastenpostille von 1525. Stalman 2004, Sp. 647 より引用。„Gottes Wort will gepredigt und gesungen sein.“

121) Smelik 2013, p. 8. “.. joyfully and with pleasure sing and tell it, so that others may

上でも述べたように、ルターは音楽が若者の教育に果たす役割を重視し、「若者を、この芸術 [音楽] に親しませるべきである、なぜなら音楽によって手際がよく素晴らしい人がつくられるからだ」¹²²⁾と述べている。そして、若者の教育にあたる人については、「学校教師は歌えなければならない、歌えない人は教師とは見なさない」¹²³⁾と述べた。ルターは、結婚する前から「自分に子どもがいたら、言語や歴史だけではなく、算術と一緒に、歌唱や音楽も学ばせたい」と語っていた¹²⁴⁾。実際、16歳で学士号をとった長男をトルガウの学校に送ってヴァルターのもとで音楽を学ばせたことから、ルターがどれほど音楽を重視していたかが分かる¹²⁵⁾。

次に音楽と言葉との関係について見ていきたい。ルターは「音符は歌詞を生き生きとさせる」¹²⁶⁾とし、「歌詞、音符、アクセント、旋律、形式、これらはみな真の母国語とその抑揚から生まれなければならない、そうでなければ猿真似のようなものでしかない」¹²⁷⁾と述べ、これについては、音楽家ヴァルターが、ルターは正しいアクセントやコンセント [アクセントのない音節、または第2アクセントのこと] に従って、きわめて巧みに歌詞に音符をあてたことを証言している¹²⁸⁾。【資料1】でミュンツァーのドイツ語訳と比較したときにも、この

hear ...”

122) WA Tischreden 1, S. 490 (Nr. 968). „Die Jugend soll man stets zu dieser Kunst gewöhnen, denn sie macht feine geschickte Leute.“

123) WA Tischreden 5, S. 557 (Nr. 6248). „Ein Schulmeister muß singen können, sonst sehe ich ihn nicht an.“

124) WA 15, S. 46. „Ich rede für mich: Wenn ich kinder hette und vermöchts, Sie müsten mir nicht alleyn die sprachen hören, sondern auch singen und die musica mit der gantzen mathematica lernen.“

125) Walch 1904, Sp. 2782-2783. トルガウの学校教師クローデル Marens Crodel (1487-1549) 宛の1542年8月26日付の手紙。

126) WA Tischreden 2, S. 518 (Nr. 2545b). „Die nothen machen den text lebendig.“

127) WA 18, S. 123 (*Wider die himmlischen Propheten*). „Es mus beyde text und notten, accent, weyse und geperde aus rechter mutter sprach und stymme komen, sonst ists alles eyn nachomen, wie die affen thun.“ ここで「猿真似」と言っているのは、ミュンツァーのドイツ語訳のことである。

128) Stalman 2004, Sp. 647. „wie er [=Luther] alle Noten auff den Text nach dem rechten accent vnd concert so meisterlich vnd wol gerichtet hat.“

ことはお分かりいただけただろう。

4. まとめ

すでに述べたように、ドイツ語で礼拝を行ったり、ラテン語の聖歌をドイツ語に訳したりしたのは、ルターが最初だったわけではない。しかし、ルターのドイツ語賛美歌が現代まで大いに歌い継がれている理由としては、改革を急がずじっくりと定着させていったこと、単にラテン語をドイツ語に逐語訳するというのではなく、信念をもってドイツ語らしい歌詞としたこと、そしてみずからの音楽的才能を生かして言葉にあった節回しを工夫したことなどが挙げられる。

こういったルター、あるいはルター派の賛美歌は、教えの定着に大きな力を発揮した。文字や楽譜の読めない民衆は、こういった賛美歌を覚えて歌ったので、旋律と同時に歌詞内容も記憶されたのである。また、声をあわせて歌うことで、信者たちの集団意識を高めることにも役立ったようである¹²⁹⁾。カトリックの司教のいたヒルデスハイムで1524年4月6日に「マルティンの行いを、集会や通りで昼も夜も歌ったり言ったりしてはならない」¹³⁰⁾と禁止令が出されたことから、逆にマルティン・ルターの歌を歌う人が目立ったことが分かる。また、カトリックのイエズス会士コンツェン Adam Contzen は「ルターの賛美歌は、ルターの書物や説教よりも魂に損傷を加えた」¹³¹⁾と嘆いている。つまり、ルターの書物や説教よりも、賛美歌の方が人々に教えを広める力があったということになる。

このようにルターが確立した賛美歌は、そのまま礼拝で歌い継がれただけで

129) Bach 2017, S. 20.

130) Geck 2017, S. 48. „Ock schalme von deme Martinschen handeln in den collatien edder sust up der straten dages edder nachtes nicht singen edder seggen. Wer sust darover befunden, de schal swerlick gestraffet werden.“

131) Smelik 2013, p. 10. “Luther’s hymns have done more damage to souls than all his writings and speeches.”

なく、このあとルター派の音楽家たちにとって豊かな創作の泉になっていく。賛美歌の旋律を用いた合唱曲、オルガン曲などが教会で演奏され、さらには交響曲などにもとり入れられて教会の外でも演奏された。ルターの歌がなければ、シューベルトやシューマンの歌曲は生まれなかったとまで指摘する研究者もいるほどである。ドイツ語圏がまだ音楽の先進地ではなかった頃に、ルターがこのような音楽活動を行い、多声音楽や楽器を礼拝に積極的にとり入れたことが、その後のルター派地域、ひいてはドイツ語圏における音楽の発展に寄与したと言えるのではないだろうか。

引用文献

- Ameln, Konrad hrsg. *Das Erfurter Enchiridion*. (Erfurt 1524) Faksimiledruck. Kassel et al: Bärenreiter, 1983. (Documenta musicologica, Erste Reihe, XXXVI) [Ameln 1983-1]
- Ameln, Konrad hrsg. *Das Klugsche Gesangbuch 1533*. (Wittenberg 1533) Faksimiledruck. Kassel et al: Bärenreiter, 1983. (Documenta musicologica, Erste Reihe, XXXV) [Ameln 1983-2]
- Ameln, Konrad. „All Ehr und Lob soll Gottes sein. Ein deutsches Gloria – von Martin Luther?“ In *Jahrbuch für Liturgik und Hymnologie* 31 (1988) : 38-52. [Ameln 1988-1]
- Ameln, Konrad hrsg. *Das Babstische Gesangbuch 1545*. (Leipzig 1545) Faksimiledruck. Kassel et al: Bärenreiter, 1988. (Documenta musicologica, Erste Reihe, XXXVIII) [Ameln 1988-2]
- Bach, Govert Jan. *Martin Luther und Johann Sebastian Bach: Zwei grenzüberschreitende Genies*. Amsterdam: Rubinstein, 2017.
- Geck, Martin. *Luthers Lieder: Leuchttürme der Reformation*. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 2017.
- Heimrath, Johannes und Michael Korth hrsg. *D. Martinus Luther: Ein feste Burg: Luthers Kirchenlieder nach der Ausgabe letzter Hand von 1545*. München und Zürich: Artemis Verlag, 1983.
- Jenny, Markus. *Luthers geistliche Lieder und Kirchengesänge: Vollständige Neuedition in Ergänzung zu Band 35 der Weimarer Ausgabe*. Köln: Böhlau-Verlag, 1985. (Archiv zur Weimarer Ausgabe der Werke Martin Luthers, 4)
- Küster, Konrad. *Musik im Namen Luthers: Kulturtraditionen seit der Reformation*. Kassel: Bärenreiter-Verlag Karl Vötterle, 2016.
- Leaver, Robin A. “Luther, Martin.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Second Edition (2001), Volume 15, pp. 364-369.
- Leaver, Robin A. *Luther's Liturgical Music: Principles and Implications*. Minneapolis: Fortress Press, 2017. (Lutheran Quarterly Books) [Leaver 2017-1]
- Leaver, Robin A. *The Whole Church Sings: Congregational Singing in Luther's Wittenberg*.

- Grand Rapids, Michigan: Willam B. Ferdmans Publishing Company, 2017. [Leaver 2017-2]
- Lloyd, Rebecca. “Bach: Luther’s Musical Prophet?” *Current Musicology* 83 (Spring 2007) : 5-32.
- Marshall, Robert L. and Robin A. Leaver. “Chorale.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Second Edition (2001), Volume 5, pp. 736-746.
- Nettl, Paul. *Luther and Music*. Translated by F. Best and R. Wood. (1st ed. The Muhlenberg Press, 1948) Reissued: New York: Russel & Russel, 1967. [原題・原出版地表記なし]
- Rödding, Gerhard. *Ein neues Lied wir heben an: Martin Luthers Lieder und ihre Bedeutung für die Kirchenmusik*. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlagsgesellschaft, 2015. (Neukirchener Theologie)
- Rößler, Martin. *Die Wittenbergisch Nachtigall: Martin Luther und seine Lieder*. Stuttgart: Calwer Verlag, 2015.
- Smelik, Jan. “Ein feste Burg: Bach and Luther.” In *Bach & Luther: Bach in context*, pp. 8-24. Etcetra¹³²⁾, 2013.
- Stalman, Joachim. „Luther, Martin.“ In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Personenteil 11 (2004), Sp. 636-654.
- Walch, Johann Georg. *Dr. Martin Luthers Sämtliche Schriften, Einundzwanzigster Band, Erster Theil, Dr. Luthers Briefe (Erste Abtheilung) : Briefe vom Jahre 1507 bis 1532 incl.* St. Louis: Concordia Publishing House, 1904.
- Walter, Johann. *Das geistliche Gesangbüchlein „Chorgesangbuch“: Faksimile Nachdruck des Zweidruckes Worms 1525*. Hrsg. von Walter Blankenburg. Kassel et al.: Bärenreiter, 1979. (Documenta musicologica, Erste Reihe, XXXIII)
- Walter, Johann. *Lob und preis der löblichen Kunst Musica: Durch H. Johan Walter. Wittenberg. 1538*. Faksimile-Ausgabe. Hrsg. von Wilibald Gurlitt. Kassel: Bärenreiter, 1938.
- Zahn, Johannes. *Die Melodien der deutschen evangelischen Kirchenlieder aus den Quellen geschöpft und mitgeteilt von Johannes Zahn*, 6 Bde. (Gütersloh 1889) 3. Nachdruck. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 2006.
- [編著者名および出版年表記なし] *Evangelisches Gesangbuch. Ausgabe für die Nordelbische Evangelisch-Lutherische Kirche*. Kiel: Lutherische Verlagsgesellschaft. [EG]
- D. Martin Luthers Werke, kritische Gesamtausgabe*. Weimar: Hermann Böhlau Nachfolger, 1883-2009. [WA]

大角欣矢「ルター」『岩波キリスト教辞典』東京：岩波書店、2007年、1202～1203頁。
 徳善義和『ルターと賛美歌』東京：日本キリスト教団出版局、2017年。
 徳善義和ほか訳『ルター著作選集』東京：教文館、2012年。(キリスト教古典叢書)
 松浦純『十字架と薔薇。知られざるルター』東京：岩波書店、1994年。
 ルター著作集編集委員会編『ルター著作集第一集第六巻』東京：聖文舎、1963年。

132) 出版地表記なし。Etcetra社の本社は、ベルギーのLummenである。

Martin Luther und die Musik

Sachiko KIMURA

Im Jahre 2017 wurde das 500. Jubiläum der Reformation gefeiert, und auch viele Musikveranstaltungen fanden statt. In Japan ist jedoch nicht bekannt, dass der Reformator Martin Luther (1483–1546) musikalisch begabt war, selber viele Kirchenlieder dichtete und zudem komponierte. In diesem Beitrag wird zum einen erörtert, wie Luther Musik begriff und zum anderen wie er die Musik in seiner Tätigkeit nützte.

Luther betrachtete Musik als „ein Gabe und Geschenke Gottes“ und gab „nach Theologia der Musica den nächsten Locum und höchste Ehre“. Er schrieb, „Gottes Wort will gepredigt und gesungen sein“. Im Gottesdienst ließ er sogar mehrstimmige Gesänge singen und Musikinstrumente spielen, während andere Reformatoren, wie Calvin oder Zwingli, nur einstimmige Psalmen erlaubten. Er dachte auch, dass die Musik für die Erziehung der Jugend eine große Rolle spiele.

Bekanntlich übersetzte Luther die Bibel ins Deutsche und führte die deutsche Messe ein. In seiner Schrift „Formula missae et communionis“ (1523) schrieb er, dass „wir viel deutsche Gesänge hätten, die das Volk unter der Messe sänge“ und fing an, Kirchenlieder auf Deutsch zu dichten. Sein erster Choral „Ein neues Lied wir heben an“ wurde 1523 veröffentlicht; 1524 wurden seine 24 Lieder in Gesangbüchern gedruckt. Insgesamt sind etwa 43 deutsche Kirchenlieder bzw. liturgische Gesänge Luthers überliefert, davon hat er vermutlich 23 alleine vertont, und 13 sind Luthers Bearbeitungen lateinischer Vorlagen.

Luther war nicht der erste Reformator, der Gottesdienste auf Deutsch abhielt und deutsche Kirchenlieder verfasste. Da er aber dabei sehr auf Eigenschaften der deutschen Sprache achtete, auf Grund von seinem musikalischen Talent zum Text passende Melodien erfand (cf. Notenbeispiel 1: Vergleich zwischen Thomas Münzers Lied und Luthers Lied) und die Erneuerung nicht eilig zwang, wurden Luthers bzw. lutherische Kirchenlieder gut aufgenommen.

Die deutschen Kirchenlieder waren für die Verbreitung des Glaubens wirksam. Sie wurden nicht nur im Gottesdienst von der Gemeinde gesungen, sondern waren auch und sind die Quelle der Schöpfungen vieler Komponisten: Sie haben zur Entwicklung deutscher Musik beigetragen.